

1950年代のファンタジー文学

—伝統の象徴としてのカントリー・ハウス—

140264 小林真紀

序章

イギリスにおける児童文学の本格的な歴史は19世紀後半から始まり、特に傑出した作品が多く出版された1860年代と1950年代はイギリス児童文学の黄金時代と呼ばれている。第一次黄金時代である1860年代には『水の子』(1863)、『不思議の国のアリス』(1865)、「黄金の鍵」(1867)などが出版され、『柳に吹く風』(1908)、『ピーター・パン』(1911)へと続いていく。一方、第二次黄金時代と呼ばれる1950年代は『床下の小人たち』(1952)、『グリーン・ノウの子どもたち』(1954)、『トムは真夜中の庭で』(1958)、『ナルニア国物語』(1950-1956)など、児童文学の中でも特にファンタジー文学が多く出版されたファンタジー黄金時代でもある。この時代は児童文学のジャンル以外でもファンタジーが注目を集め、『指輪物語』(1954-1955)など近年のファンタジーブームの中で映像化された影響から日本でも人気の高い作品が多い時代である。

また、1950年代イギリスの児童向けファンタジー文学の特徴として、物語の舞台や冒険の始まりの場所として、当時イギリスの風景から消えつつあった古い館、カントリー・ハウスが登場することがあげられる。カントリー・ハウスが登場する作品は『時の旅人』(1939)や『思い出のマーニー』(1967)など他の時代にも出版されているが、1950年代では『床下の小人たち』、『グリーン・ノウの子どもたち』、『トムは真夜中の庭で』、『ナルニア国物語』など代表的なファンタジー文学のほとんどにカントリー・ハウスが登場している。

本論文では、1950年代に出版されたイギリスのファンタジー文学にカントリー・ハウスがなぜ登場するのか、その理由を明らかにすることを主題とする。これにより1950年代のファンタジー文学に共通するテーマを示し、作品の新たな価値を明らかにすることが本論文の目的である。1950年代のファンタジー文学の中で物語の舞台をカントリー・ハウスと思わしき古い館やその庭とする、メアリー・ノートン (Mary Norton, 1903-1992) の『床下の小人たち』、ルーシー・M・ボストン (Lucy Maria Boston, 1892-1990) の『グリーン・ノウの子どもたち』、フィリッパ・ピアス (Ann Philippa Pearce, 1920-2000) の『トムは真夜中の庭で』の3作品を取り上げる。まず同時代の作品に見受けられる幾つかの共通点は作品が書かれた1950年代のイギリス社会の影響を強く受けて生み出されたという前提のもとに、当時のイギリス社会にどのような変化が起こり、作品にそれがどう反映されているのかを明らかにする。また、カントリー・ハウスという特定の場所が舞台として選ばれるからには、カントリー・ハウス自体に作品の舞台としてふさわしい要素があるはずである。カントリー・ハウスがイギリス人にとってどのようなものなのか、作中でどのような役割を果たし何を象徴するために描かれているのかを考察することでなぜカントリー・

ハウスが多く登場するのか、その理由を探っていく。

第 1 章ではイギリスのファンタジー文学の系譜を辿り定義づけを行うとともに、ファンタジー文学の役割とファンタジー文学と現実世界の関係性について考察する。これを踏まえて、カントリー・ハウスを舞台とする、ノートン、ボストン、ピアスの 3 つの文学作品に影響を与えたと考えられる 1950 年代当時のイギリスの経済状況や国力、文化的変化について論じる。

第 2 章ではカントリー・ハウスの歴史について説明した上で、なぜカントリー・ハウスが 1950 年代のファンタジー文学の舞台となったのかについての仮説を提示する。その仮説の妥当性を検証するため、『床下の小人たち』、『グリーン・ノウの子どもたち』、『トムは真夜中の庭で』の 3 作品を過去と伝統という観点から分析する。また、各作品におけるカントリー・ハウスに関する描写を取り上げ、作中の登場人物にとってカントリー・ハウスがどのような存在であるのか、カントリー・ハウスの役割について論じ、3 作品におけるカントリー・ハウスの描かれ方に共通点があるのかを論じていく。

第 3 章ではカントリー・ハウスをイングランドの伝統と過去の象徴として見なすことができるかという観点から仮説の検証を行う。そのために 1950 年代当時にカントリー・ハウスが置かれていた状況やカントリー・ハウスのイメージについて考察する。筆者がイギリスで行ったインタビュー調査の結果から、カントリー・ハウスに対するイギリス人のイメージを明らかにする。そして貴族の遺産であるカントリー・ハウスが第二次世界大戦後、国民遺産として国民に受け入れられていった経緯について論じる。これによりカントリー・ハウスがイギリス人にどのように受け入れられ、作品での描写へと至ったのかを考察する。そして 3 作品においてどのような社会の状況に影響されたために、そしてカントリー・ハウスが持つどのような歴史のためにカントリー・ハウスが舞台として選ばれたのかを結論づける。

1. ファンタジー文学と現実社会

本章では、まず曖昧な使われ方をするファンタジーという言葉の明確な定義づけを行う。そしてファンタジー文学の役割やファンタジー文学と現実社会の関係性について論じる。これを踏まえて1950年代のイギリス社会の状況について論じ、ファンタジー文学にも影響を与えたと考えられる経済状況や文化、社会的変化について考察する。

1-1 ファンタジー文学とは何か

本節では、ファンタジー文学の系譜を辿り、ファンタジー文学の定義づけを行う。『広辞苑』によると「ファンタジー (fantasy)」という言葉自体は①空想、幻想、白日夢②幻想的な小説・童話③幻想曲という意味を持つ。日常的に空想的なものを意味する言葉として用いられることからファンタジーという言葉は文学用語としても曖昧な使われ方をされることが多く、広義では神話や伝説、童話、SF、怪談話まで含まれる。では狭義の意味でのファンタジー文学は神話や童話とどこで区別され、どのような物語を意味するのだろうか。

ファンタジー文学は宗教的神話や民間伝承などを起源として生まれてきた。日本の童話作家である佐藤さとは、口承伝承を基にする昔話は創作された昔話へ、そしてファンタジー文学へと分化していったと述べている(76)。昔話とファンタジー文学の違いとして佐藤は、昔話は世界が一次元的である、つまり魔法などの不思議なことに出会っても登場人物は不思議とは思わないこと、そして登場人物は物語の筋を発展させるための類型でしかないことを指摘する。佐藤によるとこれはファンタジー文学と対極にある特質であり、ファンタジー文学は現実と非現実を区別した二次元性の物語世界を持ち、登場人物は単なる類型ではなく人格をもった個人として描かれる(69)。

この違いを念頭に、イギリスにおけるファンタジー文学の成立を確認することにする。英語児童文学研究者である桂宥子によると、イギリスでは17世紀から厳しいピューリタニズムが台頭したことで、空想や妖精などは許しがたいものとして禁じられ、ファンタジー文学の原型である昔話は姿を消すこととなった(10)。しかし、18世紀に入り、イギリス社会が産業革命とそれに伴う自然破壊、公害、貧困、犯罪などを経験すると、工業化により精神や人間性が蝕まれていくことを憂い、人間性の回復を望む声が芸術家の間から高まる。時代が大きく変わったことで新しい人間認識が生まれ、特に「子ども」に対する考え方が変わり、それまで子どもは「未熟な大人」、「大人の縮小版」と考えられていたのが「子ども時代」という独自の存在が認められるようになった。ウィリアム・ブレイクやワーズワースといったロマン派の詩人は子どもの持つ想像力を賛美し、子どもを純真・無垢な存在と見なし成長・発展のシンボルとする新たな児童観が生まれたと桂は述べている(11)。このような流れの中でイギリスでもマザーグースなどの伝承童謡が見直されるなど、昔話や妖精物語が再び日の目を見ることになる。1823年には昔話を集めたグリム兄弟の童話集が、1846年には当時の代表的な創作童話であるアンデルセン童話が英訳され発刊された。

その流れをうけて1850年代には、昔話のように匿名の誰かではなく名前のわかる作家が、

伝統的な昔話におけるしきたりやルールを利用して一つの昔話の世界を創るようになったと英語児童文学研究者の定松正は述べている(43)。定松によると、昔話と同じように別世界を描いているが、物語に社会問題を投影したジョン・ラスキンの『黄金の川の王様』(1851)や、同様に別世界を描きつつ当時のイギリス政府の争いごとを揶揄するウィリアム・M・サッカレーの『バラと指輪』(1855)はファンタジー文学の到来を感じさせる、昔話とファンタジー文学の橋渡しをした作品である(43-44)。

創作された昔話を経て、イギリス児童文学の黄金時代である1860年代にファンタジー文学も確立される。この時代から魔法や超自然的な出来事がありふれた別世界を描くのではなく、現実の世界から非現実的な別世界へ渡っていくというファンタジー文学の手法がとられるようになると定松は指摘する(44)。1863年に出版されたチャールズ・キングズレー(Charles Kingsley, 1819-1875)の『水の子』はこの手法を最初に用いた近代ファンタジー文学の祖である。また、児童文学研究者の谷本誠剛は「ファンタジイは、フェアリー・テールズ的な不思議を扱いながらも、それを小説的な広がりリアリズムの手法で描いていくというものである」と述べ、それは最初に『水の子』という形であらわれたと述べている(40)。このリアリズムの手法に関して、前述の昔話に対するファンタジー文学の特徴の一つである個性をもった登場人物は、ロマン主義の後にリアリズムの延長線上ではじめて登場するものであると佐藤は指摘している(75)。19世紀後半の近代文学では、客観描写を基本とした小説が主流になり、人間の本質を追求し、その内面世界をもさらけ出すような傾向が強まった。こうした流れが空想までもリアリズムの手法によって描こうとする試みを生んだとしても不思議ではないと佐藤は述べている(75)。リアリズムは近代ファンタジー文学の重要な構成要素であるといえる。

そして、「黄金の鍵」(1867)や『北風のうしろの国』(1871)を描いたジョージ・マクドナルド(George MacDonald, 1824-1905)はキリスト教的宇宙観に基づいた豊かな想像力で別世界の不思議を描くファンタジー文学の先駆けとなり、C・S・ルイス(Clive Staples Lewis, 1898-1963)やJ・R・R・トールキン(John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973)などの後世のファンタジー作家へ大きな影響を与えたと谷本は指摘している(45)。ルイスとトールキンはファンタジー文学が子どもだけでなく、大人も楽しめるものになったターニングポイントであるとファンタジー作家の井辻朱美は述べている。特に、トールキンは今までお話、昔話として語られていた不思議の世界を、現実を描写するようにリアルに書いた。現実的な日常や生活を事細かに書き、エルフやドラゴンのような不思議な生き物も本当に生きている生物としてリアルに描くことで、ファンタジーの世界が本当にあるように思わせ、ファンタジー文学を大人にも広めていったのである(83)。

ここまでファンタジー文学の成立過程を確認し、ファンタジー文学と昔話の違いについて論じてきた。ファンタジー文学は昔話を起源とし、妖精や空想を扱う一方で、その非現実的な世界や出来事、登場人物の描写はリアリズムの延長線上にある。ファンタジー文学が大人に受け入れられるようになったのも、トールキンが非現実的な出来事を実際に起き

ていることのようにリアルに描きだしたことによる。前述のとおり、リアリズムは近代ファンタジー文学に欠かせない要素であり、狭義の意味でのファンタジー文学はこのリアリズムの手法によって神話や昔話と区別され得る。このようなファンタジー文学の系譜と特徴を踏まえ、本論文においては、神話や童話などの昔話を起源として超自然的な事柄、非現実的な物事を扱いながら、リアリズムの手法によってそうした非現実の要素や物語の登場人物、舞台となる世界を可能な限りリアルに描くものをファンタジー文学と定義する。

1-2 ファンタジー文学と現実の関係

前節でファンタジー文学は現実ではありえない物事を可能な限りリアルに描くものであると定義した。ではファンタジー文学は非現実的な出来事を描くことで、読者に何をもたらすのだろうか。ファンタジー文学が果たす役割とは何か、現実世界とファンタジー世界にはどのような関わりがあるのかを本節では論じていく。

SF ファンタジー雑誌『インターゾーン』の編集者・出版者であるデイヴィッド・プリングルは、ファンタジー文学は「<心の願望>の物語である」と述べ、ファンタジー文学はここよりも優しい世界、よりよい自分への憧れといった願望の成就を扱い、心を癒そうとするものだとして定義している。ファンタジー文学の中で願望は成就し、すべてが可能であるような至高の世界を創り出すことで人の抱える苦しみは癒されるとプリングルは述べている(6)。つまりファンタジー文学は人間の心の願望を描きだし、それを成就させることで人の心や辛い現実に対する癒しを与えるものだと考えられる。

作家であり言語学者でもある J・R・R・トールキンは、妖精物語（ファンタジー）のもつ主な機能として「逃避」と「慰安」をあげている(124)。トールキンによるとファンタジー文学は大量生産や機械化の進む現実社会からの逃避に加え、飢え、渇き、貧乏、苦痛、悲しみ、不正、死からの逃避を可能にし(133)、願望を想像力で充足する「慰め」と、「幸せな結末の慰め」(137)を読者に与える。ファンタジー文学は「逃避文学」の形式のひとつだとしてしばしば否定的に見なされるが、重要なのはトールキンが「逃避」を非難することは困難である(125)と述べている点である。ファンタジー文学が与える逃避と慰めは感傷的で後ろ向きなものではなく、現実世界におけるありふれた物、見なれた物の魅力を再発見させる力を持つ。作家、中世文学研究者の C・S・ルイスは、妖精の国は現実の世界を退屈に思わせるのではなく、むしろ深い印象によって人を揺り動かし、人生を豊かにすると述べている。「魔法の森について読んだからといって子どもは本当の森を軽蔑したりはせず、そのために現実の森がいささか魔法の雰囲気帯びることになる」(53)とルイスが述べるように、ファンタジー文学は現実の世界を生きることに前向きな影響を与えといえる。よってファンタジー文学の役割は、現実からの逃避を可能にし、願望の充足などの慰安や想像力、感動を読者に与えることで現実を生きる力を与えることであると考えられることができる。

ここでファンタジー文学と現実の関係に注目したい。ファンタジー文学に現実からの逃

避と慰安の場所を与える力があるならば、ファンタジー文学は社会全体が深刻な問題を抱えているとき、より多くの人に読まれ評価されることになるのではないか。英文学研究家の安藤聡は『水の子』、『不思議の国のアリス』、『黄金の鍵』等が出版された 1860 年代、『柳に吹く風』、『プックの丘のパック』(1906)、『ピーター・パン』等の 1900 年代、そして『ナルニア国物語』、『床下の小人たち』、『グリーン・ノウの子どもたち』、『トムは真夜中の庭で』、『指輪物語』等の 1950 年代をファンタジー黄金時代だとし、その背景に当時蔓延していた悲観主義があると述べている (2011: 122)。この悲観主義の背景として、1860 年代にはイギリスの繁栄に見え始めた翳りや社会構造の矛盾の露呈に加え、ダーウィンの進化論によるキリスト教社会の動揺があった。1900 年代はヴィクトリア朝時代の終焉、産業革命による自然破壊や伝統的風景の危機が問題視され、つづく 1950 年代は第二次世界大戦後の混乱や植民地の独立による大英帝国の終焉といった問題があったと安藤は指摘している (2011: 122-123)。キリスト教社会が揺らいだ 1860 年代に『水の子』のようなキリスト教と科学の調和を試みた作品が出版されているように、それぞれの時代における問題は作品の内容にも反映されている。ファンタジー文学は社会が大きな揺らぎや問題を抱える時代に書かれ、現実社会の問題とその解決を描いたり、現実とは真逆の理想的な世界を舞台にすることで現実を批判するなど、現実と密接に結びついているのである。

また、近現代のファンタジー文学は、都市化や機械化、あるいは情報化によって想像的要素が失われた現実世界に対するアンティテーゼという側面を持つと安藤は述べている (2011: 126)。グリム童話やアーサー王伝説では非現実的事件の舞台は近隣の森であったが、18 世紀には国外へ移り、やがて地球上を離れることになった。これは森の生態系が解明されれば森は非日常的な異界ではなくなり、世界地図が完成すれば外国もまた非現実の舞台ではあり得なくなったからだと安藤は指摘している (2011: 126)。前節において、昔話では不思議なことが起こっても登場人物がうろたえることはないと言ったが、井辻は昔話の時代には現実と不思議な世界がはっきりとは途切れておらず、森に行けば妖精がいる、怪しい小路へ行けば魔女がいるといったように別世界と現実世界の 2 つがあるという認識ではなかったと述べている (78)。現代では魔法や不思議な出来事が起こる余地は現実世界にはなく、現実と非現実をはっきりと区別される。そのため現実に行き場のない想像力がファンタジー文学にその居場所を求めるのだろう。別世界や過去で起こる非現実的な出来事を描くファンタジー文学は、科学技術の発達した想像力の余地のない現代社会に対立するものなのである。

ここまで、ファンタジー文学の役割について考察し、現実との関係について論じてきた。ファンタジー文学は現実からの逃避と願望の成就や幸せな結末といった慰安を読者に与えることで現実世界における新たな幸福や再発見をもたらす。そのため優れたファンタジー文学は社会が大きな問題を抱える時代に書かれ広く読まれることになる。ファンタジー文学の中で描かれる世界自体が現実に対峙するものであることに加えて、作品中でも現実の問題を扱い、現実とは真逆の世界を描くことで現実を批判することが多く、作品に現実社

会を反映する。ファンタジー文学は現実の状況や作者の危機意識に強く影響されて生み出され、別世界を描いていても現実世界を映し出す鏡として捉えることができるのである。

1-3 戦後のイギリス社会

前節においてファンタジー文学は現実社会の影響を強く受けて生み出され、現実の問題や危機を描き出すものであることを確認した。こうしたファンタジー文学の特性から 1950 年代のファンタジー文学にカントリー・ハウスが多く登場するという共通点も、当時のイギリス社会の影響を受けて生まれたものだと考えられる。現実のどのような問題に影響されてこの共通点が生まれたのかを明らかにするため、本節では当時のイギリスで起きた変化や問題について考察する。優れたファンタジー文学は大きな問題を抱える時代に多く描かれると前節で論じたが、1950 年代はファンタジー黄金時代と言われていることから当時のイギリスは多くの問題を抱えていたはずである。

1950 年までのイギリスは戦争が残した爪跡とそれに伴う経済的不振に苦しんでいた。戦争中に多くの都市は空襲の被害にあい、食料や衣料の配給は戦後 9 年間も続いた。また、戦争のために経済は疲弊し巨額の負債をアメリカ合衆国に負っていた。疲れ果て、幻滅した人々が一様に抱いた見方は、イギリスは「戦争に勝ったが、平和に負けた」というものであったと英米文学研究者のロバート・クロスは述べている。クロスは、過去の帝国の栄光とファシズムに対する勝利を誇りにしていたイギリス人は、かつての大英帝国が解体され、世界の中で自国の果たす役割がとて小小さくなってしまったことで深く傷ついた現実認識に直面していたと指摘する (12)。1858 年から約 100 年間イギリスの支配下にあったインドが 1947 年に独立したことはイギリスの自尊心に致命的な一撃を与え、さらに、スエズ危機の際にアメリカの圧力に屈してエジプトから屈辱的な撤退をした 1956 年に自尊心は最も傷ついた。この事件でイギリスの軍事的な無力さが全世界に露呈されてしまったのである。このように、イギリスがもはや世界の中心的存在ではなくなったことが明らかになったことで、過去と比べてイギリス人の自国に対する誇りはかなり落ち込んでいた。傷ついた自尊心は過去の栄光に対する郷愁を呼び起こしただろうと考えられる。

一方国内では、教育制度の充実や福祉国家の確立といった良い変化も起こっていた。1944 年、子どもが 11 歳で試験に合格すれば、11 歳から 18 歳の子どもに州立のグラマースクールでの教育を無料にするという **Butler Education Act** が施行された。これは貧しい家の出身の子どもに大学へ行く機会を与え、社会進出の権利を確実にする重要な措置であったと文化学者の **David Christopher** は述べている (3)。また、戦後イギリスでは産業が崩壊し家屋も壊されていたため、より公平な社会を求めてクレメント・アトリー率いる労働党が勝利した。政府はまず雇用を確実にするため石炭、輸送、鉄、鋼鉄といった全ての主要産業を国有化した。1948 年には福祉国家が立ち上げられ、戦前とは比べ物にならないほど富の分配が公平に行われ、国民ひとりひよりはより良い住宅、無料の教育、医療、年金の恩恵を受けた。階級、収入、肌の色にかかわらず全ての人が「ゆりかごから墓場まで」面倒

を見てもらえる国となったのである。この後イギリスの伝統的な階級社会は平等で開かれた社会へと変わっていくことになる。

このように国内には明るい希望もあり、1950年以降は経済状況も好転を見せた。1951年から1961年まで、イギリスは特にマクミラン内閣の時期に前例のない好景気を迎える。完全雇用が達成され、1951年から1963年までの間に賃金は72%上昇したと見積もられている。また、平均産業収入は1955年から1960年の間に34%増加した(クロス 13)。経済の好転は国民の暮らし向きを良くしただけでなく、これにより車、流行、海外での余暇を得るなど、趣味や余暇に時間とお金を使う余裕が労働者階級に生まれた。しかしこれが文化的・社会的な変化とともに新たな問題を引き起こすことにもなる。大衆文化の発達や、若者文化が生まれたこと、そしてこれらに伴うモラルの低下と犯罪率の増加である。

労働者階級の暮らしに余裕が生まれたことで、1960年代までにテレビ、小さなラジオ、レコードプレイヤーはほとんどの家が少なくとも一つ持つほどまでに普及した。好景気に伴う消費主義と大量生産のシステムに後押しされ、TVプログラム、歌謡曲や映画などが大衆のために作られ、大衆向け小説、女性雑誌、漫画も軽い娯楽のために増えた。その中で特に存在感を増していったのが、好景気の恩恵に預かり豊かさを享受していた労働者階級の若者である。企業はお金をもっている若者をターゲットに商品売り込みはじめ、喫茶軽食堂やメロディバーが開店し、余暇や娯楽に使うお金を持つ世代に集合場所を与えた。彼らは新しい商業文化の消費者となったのだと Christopher は述べている(5)。また、クロスによると映画や音楽などアメリカの大衆文化が流入したことも、特に余暇の過ごし方に見られる若者の生活スタイルの変化に影響し、上の世代とのギャップを引き起こした。この頃から若者たちはイギリス社会における労働者階級の従属的な地位を拒否しはじめているとクロスは指摘している(13)。労働者階級、特に若者が文化の中心となったことで伝統的な生活様式や上流階級の文化、階級意識までもが危険にさらされることとなった。これは中産階級や上流階級の人々に加え、階級社会で生きてきた年長の労働者階級の人々にも伝統の喪失という危機感を持たせることになったと考えられる。

若者の台頭に伴い新たに生まれた問題の一つが犯罪の増加である。1953年ごろから労働者階級のギャングが登場し、暴力的な衝突がテレビで報道されるようになった。失業率は低く、社会は豊かになったのにも関わらず、21歳以下の若者による犯罪は1955年の約24,000件から1959年には45,000件を超えるまでに増加していった(Christopher 5)。大量生産の音楽、芸術、大衆向けの娯楽も個人主義、快楽主義、怠惰と墮落を助長させる一因となった。また、経済成長により存在感を増したのは若者だけではない。好景気の中で労働力が不足したため、イギリス国内の公共事業機関は、西インド諸島、インド、パキスタン、アフリカ、香港の連邦市民に仕事を提供しはじめ、戦後国内の移民は増加していった。当初、仕事を求めてイギリスにやってきた人のほとんどは家族を養う男性だった。彼らはお金を稼いで元の国に帰るつもりであったが、結果的には数年後家族や親族もイギリスに移住することになった。しかし、移民は円滑にイギリス社会に加わったわけではなか

った。異国で助け合うために作られた移民のコミュニティは地元の住人を不安にさせ、移民が増えるにつれ人種は社会的紛争の元となった。移民にとって雇用主や同僚から向けられる差別と偏見は当たり前ものとなり、イギリスの幾つかの場所は人種間の緊張が高まる場所になった。実際に 1958 年にロンドンのノッティングヒルで暴動が起きている。

Christopher が“Since the 1950s, Britain has experienced a period of accelerated social and cultural change” (1) と述べるように 1950 年代はイギリスの転換点であった。国際的には、大英帝国の崩壊や世界における地位の低下、戦後の膨大な借金のためにイギリス人のプライドは深く傷ついた。国内では、経済が好転し社会保障も充実したことで国民は豊かになったが、それに伴う大衆文化の発達、労働者階級の若者の台頭などのためにイギリスの伝統的な文化や社会構造が変化していくことになった。他にも女性解放運動や、離婚率の増加による伝統的な家族像の崩壊、信仰も影響力を大きく失い、大衆文化による個人主義や快樂主義の助長など価値観も変わりつつあった。1950 年代のイギリスは、国民の生活が豊かになり未来に希望を抱くことができた時代であった反面、急速な変化は不安や新たな問題を引き起こし、伝統的な価値観、階級社会、文化などが大きく揺らいだ危機の時代であったことも確かである。

これまでファンタジー文学は非現実を扱いながら、現実社会の状況、特に社会問題や危機を映し出すものであるとして、ファンタジー文学の黄金時代であった 1950 年代のイギリス社会の状況、変化や問題について明らかにした。大きな変化を迎え伝統が危機に瀕していた当時の社会の問題はファンタジー文学に何らかの形で反映されているはずである。次章では 1950 年代当時のイギリス社会の状況が作品の中にどのように表れているのか、カントリー・ハウスとどのように関係しているのかを考察した上で、なぜカントリー・ハウスが 1950 年代のファンタジー文学の舞台となったのか仮説を提示し、カントリー・ハウスを舞台とする 1950 年代のファンタジー文学を一つずつ分析する。

2. 1950年代のファンタジー文学における伝統の危機とカントリー・ハウス

前章ではファンタジー文学と現実社会のつながりについて、そして1950年代当時イギリス社会が抱えていた伝統的生活や価値観の喪失の危機といった問題について述べた。本章ではこれらを踏まえて、何故1950年代のファンタジー文学にカントリー・ハウスが多く登場するのか、仮説を提示する。その仮説の妥当性を検証するため、カントリー・ハウスを物語の舞台とする『床下の小人たち』、『グリーン・ノウの子どもたち』、『トムは真夜中の庭で』の3つの作品を伝統と過去という観点から分析する。

2-1 カントリー・ハウスとは何か

前章で確認した、ファンタジー文学は現実世界を反映し社会の問題や危機を扱うという特性から、1950年代に多くのファンタジー文学の舞台となったカントリー・ハウスはその時代の何らかの問題を表わしていると考えられる。本節ではまずカントリー・ハウスとは何か、カントリー・ハウスの歴史と現在置かれている状況を説明する。そして前章で述べた1950年代当時のイギリス社会の問題とカントリー・ハウスがどのようにつながるのかを考察し、何故カントリー・ハウスが1950年代のファンタジー文学の舞台として選ばれたのかについての仮説を提示する。

カントリー・ハウスとは上流階級である貴族やジェントリといった地主の住居として建設されたイングランドの田舎にある広大な館のことである。これに対し、カントリー・ハウスを所有する貴族などが社交期間をロンドンで過ごすための建物をタウン・ハウスという。多くのカントリー・ハウスは特にヘンリ8世の時代に建設されたが、これはヘンリ8世が行った宗教改革によるものである。ヘンリ8世は国や王よりも強大な力をもっていた修道院を解散・解体させ、その土地と建物を没収し、貴族や実力者に与えた。16世紀後半には華麗なエリザベス朝様式に至る新しいルネサンス様式が現れてきて、壮大なカントリー・ハウスが出現した。また、16世紀まではイングランドの領主にとって外敵の襲撃を防ぐことが最大の関心事であったために彼らは城か堀に囲まれた館に住んでいたが、中央政府と司法制度を持つようになって自己防衛から解放されたため、生活を楽しむためにカントリー・ハウスを建設するようになったのである。

その後1688年から1715年の間に新たに12人の公爵が誕生し、彼らは広大な土地に屋敷を構え目に見える絶大な権力の象徴として君臨した。この中でも特にマールバラ公爵家のブレナム・パレスを含む8つの屋敷が有名である。時代が深まると、権力の象徴として以外にも「学問」や「趣味」がカントリー・ハウスの設計に反映されるようになり、館内にヨーロッパ大陸へのグランド・ツアーで買い求めた絵画、彫刻が飾り付けられた。しかし19世紀後半から貴族の権力とともにカントリー・ハウスは衰退しはじめる。1879年以後農業の大不振が始まり、貴族やジェントリの所有財産の価値は年を経るごとに下降していった。これに伴い、彼らが持っていた政治権力は急速に彼らの手元から離れていく。20世紀に入ると、台頭してきた企業家たちが貴族に代わって莫大な富を得るようになった。

彼らはカントリー・ハウスやそこでの生活様式にほとんど関心を示さなかったが、中には都会で築いた財産を、憩いを求めて田園地帯での巨大な邸宅作りに費やす人もいた。しかし、20世紀のカントリー・ハウスは家というよりも、政治的戦略に利用されたり、週末にパーティを開いたり狩りをしたりスポーツを楽しむための場所で、ロンドンの喧騒を避ける別荘のようなものになった。また、カントリー・ハウスは数十人、数百人の使用人のおかげで、快適な生活や美しい庭園を維持することができていた。しかし地方雇用の拠点であったカントリー・ハウスの地位は産業革命で工場にとってかわられ、さらに圧倒的な数の人間を必要とする戦争がカントリー・ハウスに革命的变化をもたらしたと英文学者の杉恵惇宏は指摘している（51）。

第二次世界大戦中、ロンドンは連日のように対岸のフランスから飛来してくるドイツ空軍の脅威にさらされていた。そこで人や貴重品、そして軍司令部の疎開先になったのが田園地帯に点在するカントリー・ハウスであった。杉恵によるとカントリー・ハウスのオーナーにとっては誰が疎開してくるのかは重要な問題であり、女学校の生徒たちや政府省庁、ボーイズ・スクールまではぎりぎり歓迎された（52）。一方で軍隊の収容施設となった館はカントリー・ハウスに何の関心もない若い兵士によって、館内にも外部にも最も酷い損害を受けた。ときには銃の標的にされたり貴重品が盗難にあたりして戦後の再興が不可能になった館もある。こうして何百もあったカントリー・ハウスは20世紀末から崩壊の道をたどっていった。戦後多くのカントリー・ハウスは復興を遂げることはできたものの、衰退したカントリー・ハウスの多くはナショナル・トラストの管理化に置かれることになった。ナショナル・トラストは建築業者と宅地造成業者からイングランドの未開発地を守るために1894年に設立されたボランティア団体である。大戦後、作家や歴史家、週刊誌の寄稿者などが、カントリー・ハウスの多くが瀕死の状態にあること、そしてその原因が税金、とくに相続税に起因することを訴え、消えゆく運命にあった数多くのカントリー・ハウスに大衆の目を向けさせた。1950年にはナショナル・トラストが所有するカントリー・ハウスの数は42であったのが、1975年には90に増えナショナル・トラストの会員も46万3000人を数えるまでになった（杉恵 56）。

また、ナショナル・トラストの管理に委ねたり政府の助成を受けたりする他に、自力で支えられなくなったカントリー・ハウスを救う手段として、一定の期間と時間を設定して館を一般に公開し、入館料を徴収する方法がある。時代を経るにつれ建物の修理・修復は際限なく継続するため、この資金をどう確保するかは屋敷の管理者の手腕にかかっている。そこで戦後の試練を経験したケンブリッジシャーのバーリー・ハウスの女主人、エクセター公爵夫人は建物を1954年に一般に公開し、戦争の痛手をうけた他のオーナー達にも同調するように呼びかけた。1950年にブレナム・パレスのモールバラ公とチャッツワースのデヴォンシャー公がこれにつづき、1951年から1952年にかけて104のカントリー・ハウスが公開された。この中で個人所有のものは48、ナショナル・トラスト管理のものは34で、残りはその他の機関が管理するものであった（杉恵 65）。このようにナショナル・トラス

トによる保護活動や一般公開による資金の確保によって、戦争で大きな損壊を被ったカントリー・ハウスは修復され維持された。しかしかつて大勢いた使用人は立ち去り、監視員や説明員、ボランティアたちが訪問者の相手をするようになって貴族の権力の象徴としてのカントリー・ハウスは姿を消していった。

カントリー・ハウスは産業革命や 20 世紀末からの農業不振、戦争による破壊により存続の危機を迎え、現存するカントリー・ハウスの多くはナショナル・トラストなどのボランティア団体の管理下にある。貴族の住む館、そして貴族の権力の象徴としてのカントリー・ハウスは 1950 年代までにはほとんど無くなってしまった。では、何故当時既に衰退し姿を消しつつあったカントリー・ハウスが 1950 年代のファンタジー文学の舞台となったのだろうか。第 1 章で確認したようにファンタジー文学は現実社会における問題を扱って社会を反映するため、この時代のファンタジー文学の中で多く描かれているカントリー・ハウスは 1950 年代のイギリス社会とその問題を何らかの形で反映していると考えられる。1950 年代は伝統的な文化や価値観、風景が喪失の危機にさらされ、イギリス社会が大きく変わり始めた時代であった。そのため 1950 年代のファンタジー文学では、急激な変化の中で過去を理想化し、現実では衰退した過去の遺産であるカントリー・ハウスを作品の舞台として理想的に描いているのではないだろうか。また、カントリー・ハウスはエリザベス朝から貴族の権力の証として君臨した貴族文化の一部であることから、貴族が支配した戦前までの社会とその繁栄とも結びつくものである。このことから 1950 年代に存続の危機に瀕していたカントリー・ハウスは、当時危機的状況にあったイギリス社会の伝統に重ね合わされ、古き良きイングランドの伝統と過去の象徴としてファンタジー文学の舞台となっているのだと考えられる。この仮説の妥当性を検証するために以降第 2 節から第 4 節では『床下の小人たち』、『グリーン・ノウの子どもたち』、『トムは真夜中の庭で』の各作品におけるカントリー・ハウスや庭園に関する描写を分析し、第 3 章ではイギリス人がカントリー・ハウスに対して抱いているイメージについて考察する。

2-2 『床下の小人たち』

本節ではカントリー・ハウスを舞台とする 1950 年代のファンタジー文学の一つであるメアリー・ノートンの『床下の小人たち』に 1950 年代という時代がどのように反映されているのかを考察する。その上でカントリー・ハウスの描写に注目し、作中でカントリー・ハウスがどのような役割を果たしているのかを論じていく。

『床下の小人たち』は人間から借りたもので生活をする「借り暮らし」をしていた小人の少女アリエッティと両親のポッドとホミリーの冒険を描いた「小人の冒険シリーズ」(1952-1982) の第 1 作目である。イギリスの古風な家の床下に住む彼らは暮らしに必要なものはすべてこっそり人間から借りて生活している。床下から出て借りに行くのは人間に見られる可能性があり危険なため、本来借り手の役割は男だけが担っていたが、父親のポッドが怪我や年のために借りられなくなれば借り手がいなくなってしまうこと、そしてア

リエッティの外の世界への憧れからリエッティは父親と床上に行くことを許される。しかしはじめて借りに外に出たとき、リエッティはその家で療養していた男の子に姿を見られてしまう。そこでリエッティは男の子に本を読んであげる代わりに原っぱに住む親戚に手紙を届けてもらう約束をした。その後男の子はリエッティたちの床下の家に人形の家にある調度品を運んでくれるようになり、小人たちの黄金時代が始まる。しかし、人目につく応接間のガラス戸棚に入った飾りを男の子が持ち出すようになったことで、料理人のドライヴァおぼさんに物がなくなっていること、そして小人の存在が気づかれることになり、一家は外への移住を余儀なくされる。以上が『床下の小人たち』のあらすじである。

作者のメアリー・ノートンは1903年に物理学者の親の元にロンドンで生まれ、ベッドフォード州レイトン・ハザードの郊外にあるジョージアン様式のカントリー・ハウスで育った。女子修道院学校で学んだのち、20代の一時期をロンドンで舞台女優として過ごした。彼女は幼い頃から強度の近視で動植物を至近距離で観察する癖があり、このことから小さな生き物の視点でものを見ることを学んだという。また幼少期住んでいたカントリー・ハウスの床下の世界を空想していたことが『床下の小人たち』執筆の契機となっており、作品の舞台となる館は彼女が住んでいた館がモデルになっていると言われている。

以下では、まず、前章で確認した生活様式の変化と伝統的価値観や規範の揺らぎという1950年代当時のイギリス社会の問題が作品に反映されているのかを考察する。この作品の主演は小人の少女リエッティであるが、小人といっても妖精や超人的な能力を備えた種族ではなく、人間の身長を縮小したような人々である。彼らの暮らしぶりや価値観は借り暮らしをしているということ以外は人間とほとんど変わらないものであり、このため彼らの作中での経験に1950年代当時の人々の経験を読み取ることが可能であるだろう。まず物語のあらすじに関して、小人たちが先祖代々住んできた屋敷を出て新しい生活をはじめるといふ結末に、当時のイギリス社会の様子が反映されていると考えられる。長い間住んでいたカントリー・ハウスに住むことができなくなった小人たちは安住の地を捨てアナグマの巣に住む親戚のもとに身を寄せることになった。床下で人間から物を借りて生活してきた彼らが屋敷を出て未知の外の世界に移住することは、ただ住処を変えるというだけでなく生活が全くもって変わってしまうことを意味する。このため母親のホミリーは今までの生活を捨てて移住することを頑なに拒否している。男が借りに出て女は家を守る、人間と関わりを持つてはいけないなど規範や伝統を守ってきた彼らの生活はリエッティが人間と交流を持ったことで終焉を迎える。この結末は生活の変化、伝統的な価値観の崩壊の中にあつた当時のイギリス社会と重なるものである。さらに小人たちがいなくなった後1年ほどで床上の人間もいなくなることは示唆的であるとヨーロッパ文学研究者の伊藤紀美江は論じており(20)、小人の運命は人間の運命を示しているとも考えられる。

こうした暮らしの急激な変化に対する葛藤もリエッティと両親のポッドとホミリーの態度に現れている。ポッドやホミリーが移住を避けて今まで通りの暮らしを続けようとする

る一方で、外の世界に憧れを抱くアリエッティはひそかに移住を希望し屋敷から出ることと外の世界での冒険を望んでいる。前章において 1950 年代からのイギリスの若者の台頭について述べたが、当時若者は親世代が享受してきた伝統的な生活、階級社会等を否定していき、世代間で価値観の違いが見られるようになった。アリエッティは古い社会順列に疑問を抱き、それを超えようとする世代の代表であると児童文学記者の Madelyn Travis が述べているように (192)、自由を求めるアリエッティと保守的な両親との関係はこうした時勢の反映でもあると考えられる。小人の絶滅を防ぐために人間の男の子の力を借りて他の小人と連絡を取ろうとしたアリエッティと、安全のためにも伝統的な生活を続けるべきだとするポッドの対立は以下の引用に明白である。

「ねえ、わかってちょうだい。」とアリエッティが、たのみました。「わかるでしょ！わたし、種族を救いたいと思ったんですもの！」
[……]

しかし、ポッドは耳をかきませんでした。「種族を救う、か！」とあらあらしくくりかえしました。「おまえのようなものがいてな、アリエッティ、しきたりなんかかまわずに、いきなりなにかする。それで、わしら借り暮らしのもんが、すっぱり根絶やしになるんだ。おまえには、じぶんのしたことがわからんのかね？」(170-171)

一方でアリエッティも自身の内面に移住したいという変化と解放を望む思いと、今のままの生活を続けたいという葛藤を抱いている。人間の男の子と話しているのが両親に知られてしまったあと、部屋で一人見慣れた自分の持ち物を見渡すアリエッティの心情がこの葛藤を示している。「こういうものを失いたくないという思いが、ふいに胸にせまってきました。しかし同時に、ほかのものをなんでも手にいれたい、つまりは、冒険と安全のまざったもの—それがいちばんほしいんだということがわかりました」(178)。移住が決まったときに嬉し涙を流して喜んでいたアリエッティでさえ急激な変化にはためらいがあり、安全の保障された今まで通りの暮らしを続けたいという思いを抱いているのである。彼女が抱える変化に対する当惑と葛藤は、当時福祉国家の設立などに希望を抱きながらも伝統の崩壊に危機を感じていた多くの人が抱えていたものであろう。

さらに、小人の衰退と絶滅の危機も人間社会の危機と不安を反映したものであると考えられる。物語において屋敷にはアリエッティと両親の 3 人しか小人は住んでいないが、ポッドとホミリーの若い頃は応接間に住むハーブシコード家や朝食用の食堂に住むオーヴァマントル家、レイン＝パイプ家、ブーツ＝ラック家、オノラブル＝ジョン＝スタディントン家など多くの小人たちが住んでおり、屋敷に住む人間が減るとともに生活していけなくなり小人たちも家を出て行ったことが示されている。行先が判明してまだ生きていることが示されるのはおじさんのヘンドリアリとその家族だけで、他の小人は生きているのかも分からず、小人たちは明らかに昔に比べて衰退していることがわかる。過去の繁栄の

後に、屋敷に住む小人がどんどん少なくなっている事実はカントリー・ハウスを所持していた貴族の没落を表しているとも、大英帝国の繁栄と解体を経験したイギリス社会そのものを表しているとも考えられる。昔は床下の小人と床上の人間の暮らしがかみ合って上手くいっていたことは、支配者階級の貴族と、農民の関係に読み替えることが可能である。自分たち小人が世界の中心であって、人間は自分たちのためにいるという傲慢な態度(123)も下層階級から搾取する貴族たち、植民地支配を正当化する大英帝国の関係と重なる。であれば、小人に盗まれていることに気付いた人間によって家を追い出されたり、盗む相手の人間がいなくなったりして小人が衰退してしまったことは、階級間格差に気付いた労働者階級が貴族に重い課税を課して格差を是正したことによる貴族の衰退、植民地の独立によって搾取する相手がいなくなったイギリスの衰退を表しているのではないだろうか。小人たちが生活の大きな変化を迎えたことが当時のイギリス人に重なるだけでなく、その衰退と存在の危機は没落した貴族やイギリス社会そのもの重なり、小人たち自身が衰退したイングランドの伝統を示していると考えられるのである。

ここまで、この物語において小人たちがたどる運命には、1950年代のイギリス社会の生活様式の変化と伝統的価値観の崩壊の危機やそれに対する葛藤が反映されており、小人たち自身も貴族や帝国主義というイングランドの伝統の1つの象徴であることを確認した。これを踏まえ、次に舞台となっているカントリー・ハウスが作中でどのように描写されているのかを考察する。小人たちは伝統的な暮らしを誇りにし、守ろうとしていたが、それもその暮らしを保障する屋敷があつてのことである。物語の冒頭で、今では小人たちがいたとしてもそれは「ずっといなかのほうの、古い、しずかな家だけ」(21)だと述べられている。住んでいる人間たちが判で押したような暮らしをしていて同じことしかしないというのが小人たちにとって「安全のしるし」だからである。特にアリエッティ達の住む屋敷は、病気の療養のために一時滞在していた男の子を除いて、狩りで怪我をしてから寝たきりのソフィおばさんと料理人のドライブアおばさん、庭師のクランプフェールしか住んでおらず、彼らが住むのにうってつけの家であったと述べられている(21)。今ではなくなってしまったこうした屋敷は小人たちに伝統的な生活と安定した暮らしを保障してきたもので、既に述べた通りポッドとホミリーが移住を拒否するのは、屋敷を出て安全な伝統的暮らしを捨てるのが嫌だからである。物語の舞台となるカントリー・ハウスは小人たちの伝統的な生活の基盤となっているのである。

一方でアリエッティにとって屋敷は安全性を与えると同時に彼女を床下の退屈な生活に縛りつけるものでもある。昔外に出て猫に食べられた従妹のエグルティナの話がされた際のアリエッティの「エグルティナは逃げ出したのよ。きまつてるわ。とじこめられてるのが、いやだからよ……毎日毎日！何週間も何週間も……何年も何年も……わたしみたいに！」(77)という発言からアリエッティは床下の家は自分を閉じ込めて縛り付けるものだと感じていることがわかる。このようにアリエッティに安全性といつも通りの暮らしを提供する一方で、彼女を家の中に縛るカントリー・ハウスは、若者を縛る伝統的生活と規範

の象徴であると捉えられる。そして最後には床上の人間も床下の小人もいなくなり売却されるという作中でのカントリー・ハウスの運命は、戦後破壊され住む人のいなくなった現実社会のカントリー・ハウスの危機の反映であるとともに伝統的生活、価値観や規律の終焉を表わしていると言える。

ただ、この物語における小人たちの辿る運命とカントリー・ハウスの状況はイングランドの伝統の終焉を表していると同時に、形を変えて伝統が続いていることも示唆している。安藤は、屋敷を去った小人たちの生存が暗示されていて、小人が形を変えて生き延びているということは、伝統も消え去ることなく形を変えて存続していることの暗示であると論じている(2003: 168)。また、語り手である人間のメイおばさんが、自分だけが知っている小人の物語を次世代の子どもに語り継ぐことで、小人の存在を未来に伝えていることも、次世代に伝統をつなげる行為であると考えられる。これは伝統の衰退という問題を抱えていたイギリス社会における一つの問題の解決であり、前向きなメッセージである。

本節では、『床下の小人たち』において小人たちの辿る運命に、1950年代イギリス社会で起きていた生活様式の変化、戦前までの価値観の揺らぎが描かれていること、そして小人たち自身が危機的状況にあったイングランドの伝統を表象するものであると論じた。カントリー・ハウスはそうした小人たちが営んできた伝統的な暮らしの基盤となるものであり、彼らが伝統的な生活を捨てざるを得なくなったあと屋敷自体もなくなることからカントリー・ハウスもまた衰退した伝統を示す一つの象徴である。生活の変化に対する期待と不安、そして伝統の衰退という当時の問題を作中に色濃く反映しているこの作品において、カントリー・ハウスは伝統と深く結びつき、当時の社会を反映するために非常に重要な役割を果たしているのである。

2-3 『グリーン・ノウの子どもたち』

前節ではメアリー・ノートンの『床下の小人たち』における小人たちの生活様式や変化にイングランドの伝統の危機が表れており、小人たちと作品の舞台となるカントリー・ハウスはイングランドの伝統の衰退を象徴するものであると論じた。本節では同じく1950年代に発表されたルーシー・M・ボストンの『グリーン・ノウの子どもたち』について考察する。この物語は全6作品の「グリーン・ノウ」シリーズの1作目であるが、同シリーズは主人公や登場人物が変わっても舞台は全てグリーン・ノウという屋敷で、この屋敷を中心に展開する物語になっている。そこで本節ではこの物語の中心となるカントリー・ハウスが作品においてどのような役割を果たしているのかを論じる。

まず作者のルーシー・M・ボストンについて紹介する。彼女はイングランド北西部のマージサイド州サウスポートでメソヂストの厳格な家庭に生まれた。イースト・サセックス州の女学校に入学した後オックスフォード大学のサマーヴィル・カレッジで古典学を専攻していたが、第一次世界大戦が始まると大学を退学してフランス軍の従軍看護師として戦地に赴いた。1917年には従兄弟のハロルド・ボストンと結婚して翌年に長男を出産する。

1935年に離婚して、1937年にケンブリッジシャーの村ヘミングフォード・グレイにある1130年築の「ザ・マナー」を購入、息子のピーターとともにここに住んだ。作品の舞台となるグリーン・ノウはこの屋敷がモデルである。彼女は生涯をこの屋敷で過ごし屋敷の修復、造園、バラの保存、パッチワークに親しんだ。還暦をすぎた頃から小説の執筆をはじめ、1954年に『グリーン・ノウの子どもたち』を発表し、最終的に全6巻のシリーズになった。

『グリーン・ノウの子どもたち』は主人公のトーリーがクリスマス休暇に曾祖母の住むグリーン・ノウ屋敷を訪れ、そこでの経験によって孤独を癒し居場所を獲得するという物語である。母親を亡くし二度目の母親にもなじめずにいるトーリーはビルマに住む家族と離れてイギリスの寄宿学校で孤独な生活を送っている。グリーン・ノウに向かう彼について冒頭部分では「少年はいつものように、ひとりぼっちだった」(5)、「つらいことを我慢し、悲しみにたえているような顔」(7)と述べられ、彼の抱える孤独と悲しみが強調されている。曾祖母と過ごす休暇にも最初は不安を感じているが、屋敷に入った直後彼は屋敷に飾られた子どもたちの像が自分を歓迎しているように感じ、曾祖母のオールド・ノウ夫人に対しても初対面のはずなのに以前から知っていたような気がしている。トーリーはオールド・ノウ夫人から居間の肖像画に描かれたトービー、アレクサンダー、リネットの3人の子どもたちについての話を毎晩聞くようになり、やがて屋敷に子どもたちの気配を感じるようになる。彼らは中々トーリーの前に現れなかったが、ある雪の積もった日にととうとうトーリーは3人の子どもたちと出会って遊ぶことになる。やっと会えたと思ったら消えてしまった彼らにトーリーは再び孤独を感じるが、彼らのいた場所には必ず何かが残っているという事実で慰められる。最後には彼らが消えて帰ってこないのではないかと心配もなくなり、彼らは自由に行ったり来たりできる兄弟だと感じる。また、トーリーはグレート・チャーチの聖歌隊学校に入学することになり、休暇にはグリーン・ノウに「帰ってくる」のだとトーリーが言われたところで物語は終わっている。

以下では、まずグリーン・ノウがトーリーにとってどのような存在であるかを考察する。家族と離れたトーリーが物語の最初に抱いていた孤独はグリーン・ノウで自らが過去とつながっているという感覚を得て、グリーン・ノウを帰ってくるべき自分の居場所だと認識したことで癒されることになる。これは過去にグリーン・ノウに住んでいた3人の子どもたちとの交流などを通して過去と向き合い獲得されたものである。トーリーははじめからグリーン・ノウに歓迎されているように思いこの屋敷にずっと住んでいたように感じるなどこの場所に親しみを持っているが、最終的には3人の子どもたちが自分の前からいなくなることを恐れなくなり、自分と3人は家族だと感じたことでグリーン・ノウが本当に彼の居場所となった。ここでトーリーが過去と交流をもつために重要な役割を果たしているのがオールド・ノウ夫人とグリーン・ノウ屋敷である。

オールド・ノウ夫人が3人の子どもたちについての物語を毎晩トーリーに聞かせてくれることによって、トーリーはグリーン・ノウにはどのような人が住んでいて何が起こって

いたのか、一族の歴史を知る。児童文学研究家の川越ゆりは「館に刻まれた記憶を物語としてトーリーに語ること、それがこの作品におけるオールド・ノウ夫人の役割である」(47)と述べているが、オールド・ノウ夫人の物語を聞くことによりトーリーは自分とつながりをもつ家族の過去と交流することができる。また、日常的な会話の中でも3人の子どもについて度々言及されることで、トーリーは過去の子どもたちである彼らを自分にとって身近な存在に感じるようになり、それに伴いどんどん3人の子どもの気配も近くなっていく。オールド・ノウ夫人の話すグリーン・ノウの物語を聞くことは、トーリーがグリーン・ノウの歴史を受け入れてグリーン・ノウを真に自分の居場所とするため、そして最終的に自分の家族として受け入れる過去の3人の子どもたちと交流するために必要なことである。このことからオールド・ノウ夫人は屋敷の歴史や過去の子どもたちとトーリーをつなぐ役割を果たしているといえる。

次にグリーン・ノウが果たしている役割について考える。オールド・ノウ夫人が語るお話しに登場した子どもたちの持ち物などは屋敷の中に今でも残っている。トーリーの部屋には長男トービーのネズミの人形や妹のリネットが持っていた鳥かごがあり、トーリーは毎晩ネズミをベッドに持ち込みリネットがしていたように鳥かごに餌を入れて小鳥と遊ぶようになる。馬小屋ではトービーの愛馬フェステの名前が書かれた板が見つかり、さらに無くなったおもちゃ箱の鍵を発見して弟アレクサンダーのフルトやリネットの人形、トービーの持っていた剣を見つける。物語に登場したものが実際に屋敷で見つかることによって3人の子どもたちがこの屋敷で生きていたことが真実味を帯び、トーリーにとって彼らは遠い過去の人間でなく現実的な存在となる。物は過去を思い出させ、それを使っていた人が全く知らない人であっても彼らとのつながりを感じさせると教育水準局監査人のLesley Aersは述べているが(70)、グリーン・ノウにかつて住んでいた人たちの気配を感じさせる古いものがあふれていることで、トーリーは一族の歴史を話としてだけでなく実感をもって感じるができるのである。物語の終盤ではかつてグリーン・ノウで過ごしていた多くの子どもたちが姿を見せるが、3人の子どもを含め過去の子どもたちと出会うことができるのはグリーン・ノウが今まで住んだ人の記憶を抱え現在に至るまで保持しつづけているからである。古い屋敷の役割は古いものや記憶を保存することであり、古いものがあふれたこの屋敷には時間そのものが降り積もっている。今まで過去から現在、未来へと流れていく時間を生きてきたトーリーが、一族の物語や3人との交流を通して自分が過去とつながっていると実感することができるのは、屋敷にあふれる古いものが遠い過去と現在を結び付けているからだ。川越は述べている(48)。時間の降り積もった歴史ある屋敷もまた、過去とのつながりを感じるために必要不可欠な存在である。

古いものに溢れた屋敷は家の過去と歴史そのものであり、トーリーに今まで知らなかった家族の歴史にふれる機会を与えてくれる。そしてその歴史をオールド・ノウ夫人が物語として語ることで過去とトーリーをつなげている。トーリーが3人の子どもたちと交流し、過去とのつながりを感じるためには、オールド・ノウ夫人とグリーン・ノウのどちらも不

可欠な存在である。その過去を語り継ぐ人がいて初めて古いものは過去や歴史を表すものとして意味をもち、現在とのつながりをもつ。実際にオールド・ノウ夫人が町へ出かけた際、彼女がいない屋敷では何も起こりそうにないとトーリーは感じている (200)。過去を保存する屋敷と歴史を語り過去を現在に甦らせる夫人の両方がそろふことで、トーリーは過去と自分がつながっているという感覚を得ることができるのである。

また、グリーン・ノウが洪水や積雪により外界とは切り離されていることも過去の子どもと交流するという非日常的な出来事が屋敷で起こることを可能にしていると考えられる。オールド・ノウ夫人が新聞は読まないと言っていることも (40) グリーン・ノウが世間から隔絶されているような印象を持たせる。さらにトーリーがグリーン・ノウにやってきた夜、子ども部屋の時計が止まっていたことは、グリーン・ノウでは時間も止まっていて時の流れが外の世界とは違うということを象徴している。こうした日常から切り離された屋敷の状況がトーリーと過去の子どもたちとの交流を可能にしている。

ここまで作中でのグリーン・ノウの役割について論じてきた。グリーン・ノウは一族の歴史のつまった場所として過去とのつながりという癒しをトーリーに与えるために重要な役割を果たして、また外界から隔絶された非日常的な場所として不思議な出来事が起こることを可能にしている。では物語の舞台として非常に重要な役割をもちトーリーに救いを与える場所として描かれているグリーン・ノウには、現実社会で起きていた問題は影響してはいないのだろうか。

前節で述べたように『床下の小人たち』では当時カントリー・ハウスが崩壊の危機にあり相次いで売却されていた事実が反映され、小人たちは家をでていくことになり、その後屋敷は売却されている。グリーン・ノウは作中で外界と切り離された場所として存在しているが、こうした現実社会の状況はグリーン・ノウにも影を落としている。代々グリーン・ノウで庭師として働いてきたボギスには男の子どもがおらず後継者がいないことが作中で述べられており、現在屋敷に住んでいるのは高齢のオールド・ノウ夫人 1 人だけである。続編の『グリーン・ノウの煙突』では屋敷の修繕のために 3 人の子どもたちの肖像画を売ってしまう必要が出てきており、さらには『グリーン・ノウの敵』では屋敷を乗っ取ろうとする魔女が登場するというように、外界から隔絶されたグリーン・ノウであっても作中何度もその危機が描かれている。つまりこの作品でも 1950 年代当時進んでいたカントリー・ハウス存続の危機は示唆されているのである。また過去との交流により癒しを得るという筋書き自体が、『床下の小人たち』同様大きな変化を迎え伝統の喪失の危機を迎えていた当時の社会的問題の影響を受けて書かれたものであろう。伝統が危機にあった時代だからこそ過去や伝統といったものが与える癒し、救いが描かれたのだと考えられる。その意味ではグリーン・ノウは社会が失いつつあった過去や伝統の象徴であり、喪失の苦しみに癒しを与える存在として描かれているのである。

2-4 『トムは真夜中の庭で』

前節ではルーシー・M・ボストンの『グリーン・ノウの子どもたち』の舞台となるグリーン・ノウは、孤独なトーリーを癒す居場所という役割を持つ、過去や伝統の象徴として描かれていると論じた。本節ではフィリップ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』に焦点をあてる。この物語の舞台は真夜中にアパートの裏庭に現れる広大な庭園であるが、この庭園はカントリー・ハウスの一部である。そのため本節では『トムは真夜中の庭で』における庭園が主人公トムと庭園で出会う少女ハティにとってどのような存在であるかを考察する。

『トムは真夜中の庭で』では、『グリーン・ノウの子どもたち』と同じく過去の人間との交流が描かれている。主人公のトム・ロングは弟がはしかになったため夏休みの間叔母さん夫婦であるキットソンさんの住むアパートに預けられる。遊び相手がいないうえに外では遊ばせてもらえず退屈と孤独で夜になっても眠れない日々が続いたが、ある夜玄関の大時計が13時を打つ。トムが様子を見に階下に下りていくと裏口に美しい庭が広がっていた。トムは昼間は存在しない庭園へ每晚抜け出していき、庭園にいる人の中で唯一トムの姿が見える少女ハティと友達になる。当初トムはハティが幽霊ではないかと考えていたが、屋敷のハティの寝室を見て、その部屋が現在はアパートに改造された自分の部屋になっていること、真夜中に現れる庭園は過去のものだということに気づく。家に帰る日が近づいてきたトムは、ここに留まってハティと庭園で過ごす時間を永遠にすることはできないか試み、庭園から出ない決意をするが、その間にハティは成長して大人になってしまい、トムのことは時々しか思い出さなくなっていた。トムは気が付くと家で眠っていてその日の夜にはもう裏口に庭園は存在していなかった。家に戻る日、トムは失望の中でアパートと大時計の持ち主であるおばあさんバーソロミュー夫人に挨拶に行くのだが、彼女こそが庭園で遊んでいた少女ハティであった。トムの遊び相手や遊ぶ場所が欲しいと言う気持ちがおばあさんに少女時代の夢を見せ、その中にトムが飛び込んで過去に戻っていたのである。2人は現実にお互いの存在を認め、再会の約束をして別れた。以上が『トムは真夜中の庭で』のあらすじである。

作者のフィリップ・ピアスはケンブリッジに近いグレイト・シェルフォードにある製粉工場に生まれ、19世紀の初め頃に建てられた広い庭園のある屋敷「グレイト・ミル・ハウス」で暮らしていた。ケンブリッジ大学のガートンカレッジを特待生として卒業し、その後BBC 児童部、オクスフォード大学出版学校教育部を経て専業作家になった。ピアスが幼少期を過ごしたキングズ・ミル・ハウスの庭園が『トムは真夜中の庭で』のモデルであり、ほとんどすべての描写が細部まで正確にこの庭園を描いているという（ピアス 347）。

以下では、まずトムにとって庭園がどのような存在であるかを考察する。トムは夏休みを弟と裏庭で遊んで過ごす予定であったのに計画が台無しになったことで悔しさと失望を感じるとともに、家族と引き離され、馴染みのない叔母夫婦のもとで孤独を感じている。叔母夫婦の住むアパートについても「どことなくよそよそしかった」、「邸宅の中心がうつろで、さむざむとして、死んでいる感じなのだ」（15）と述べられている上に、トムに与え

られた部屋も少女小説が並べられていることや幼児の部屋のように窓に転落防止の横木が渡してあることで、トムはこの家を自分の居場所とは感じるができない。また、はしかにかかっているかもしれないということで外で遊ぶことが禁じられているトムには自由もない。このように物語の冒頭部分でトムは居場所を失い、退屈と孤独からの解放、自由を求めている。こうしたトムの思いは庭園を見つけたことで満たされることになる。初めに庭園を見たときからトムの心は、花が咲き乱れ、木が生い茂る魅力的な庭園に強く惹きつけられている。以下の引用は退屈で孤独な日々を経て庭園を見つけた夜のトムの描写である。

おもしろいのは庭園の方だ。庭園はほんものだ。あしたになったら、きっと庭園のなかへ、はいていこうと思った。[……]すみっこの花壇で咲きほこっているヒヤシンスの重い花のにおいが鼻さきにただよってくるような気がした。トムは、わが家のヒヤシンスのにおいを思いだした。クリスマスやお正月には、おかあさんが部屋のなかでそだてている花鉢の球根から、晩春には家のそとの花壇から、ただよってくるヒヤシンスのにおいを思いだした。わが家のことを思いうかべながら、トムは眠りにおちた。

(45)

このように庭園の発見によりトムが家を思い出して孤独と退屈を忘れ、不安なく眠りにつけていることは、庭園が居場所を失くしたトムに癒しを与える場所となることを示している。また、庭園で自分の姿が見える少女ハティと出会ったことでトムの遊び相手が欲しいという心も満たされている。そうして毎晩庭園へと抜け出していくようになったトムはやがて家に帰るよりも、叔母夫婦の家に残ってずっと庭園で遊んでいたいと思うようになる。庭園がトムの退屈と孤独を癒し、彼にとっての新たな居場所となっているのである。

一方でトムにとってだけでなく、ハティにとっても庭園とトムの存在が慰めになっている。ハティは幼くして両親を亡くし、慈善施設にいたところを叔母の屋敷に引き取られたが、叔母からは冷たく当たられ従弟たちにも馴染めずにいた。トム同様、家族と遊び相手、居場所を失い孤独に苦しんでいるのである。トムに出会うまでもハティは妖精や空想の人物などを想像しながら庭園で一人で遊んでいて「庭園を王国のような場所」(127)にしていた。トムと2人で木の中に作った家にハティが驚くほど夢中になっているのも、ハティが邸宅は叔母さんと従弟たちの家で自分はそこに置いてもらっているだけだが、木の中の家は自分の家、家庭として考えているからである(195)。ハティはトムよりも意識的に庭園を自分の居場所にしていて、庭園は屋敷の中で彼女が唯一孤独を忘れられる場所になっているのである。また、トムとハティにとってお互いが唯一の遊び相手として、そして庭園という居場所を共有する相手として慰めになり、孤独を癒す存在になっている。『グリーン・ノウの子どもたち』において過去の子どもたちとの交流がトーリーの孤独を癒し、グリーン・ノウが居場所となったように、『トムは真夜中の庭で』においてはトムとハティお

互いの存在が孤独に対する慰めとなり、庭園が2人の居場所になっているのである。

しかし『グリーン・ノウの子どもたち』でトーリーが最後に屋敷を帰ってくるべき居場所として獲得したのと違い、『トムは真夜中の庭で』における庭園は一時的な逃避の場であり、やがて失われる居場所である。ハティは確かに庭園での遊びや空想、そしてトムの存在によって孤独を癒しているが、現実世界でハティが面倒に巻き込まれたときには空想もトムも何の助けにもならなかったことがはっきりと述べられている。以下は庭園にガチョウを連れてきてしまったことで庭園が荒らされたとハティが叔母になじられた場面の引用である。

ハティは、ひとこともいわなかった。いえないのだろうとトムは思った。ハティの空想が庭園のなかへつれてきていた人物たち—聖書のなかの英雄や、妖精や、伝説の人物や、ハティひとりの空想の人物など、ハティの友だちはみんなハティを見すててしまった。トムでさえも、ハティを弁護することはできなかつたし、ハティを助けるために指ひとつ動かすこともできなかつた。(145-146)

次にトムがハティに会ったとき、トムの心配と裏腹にハティは嬉しそうに庭園での遊びに夢中になっていることから、ハティが辛い現実を生きるために必要な癒しを庭園や想像力、トムの存在が与えていることは確かである。しかしこれらはいくまでも一時的な慰め、現実逃避にすぎず、現実世界で苦境に立たされた時、助けとなるものではないのである。

さらにハティは庭園を自らの居場所として意味づけながらも庭園の外の世界に憧れを抱いている。牧場に流れている川を見たハティについて「どこまでも旅をつづけていくことのできる水がうらやましいように、熱心に下流をみつめていた」(135)と述べられていることから、彼女が屋敷と庭園という狭い世界から脱却したいという願いを抱いていることがわかる。実際にハティが大人の女性に成長して外の世界に出て友達もできた時、彼女は庭園にもトムにも昔ほどの関心を抱かなくなっている。アイススケートに夢中になったハティは「小鳥のように自由な気がするのよ。こんな気もち、はじめてだわ。わたしどこまでも、どこまでも、すべっていきたい！」(261)と発言しているが、川が下流まで凍った冬の日、トムだけを連れてイーリーの町までスケートで下っていたのも、自由にどこまでも旅をしたいという気持ちの表れであろう。孤独な少女だった頃のハティにとって庭園は孤独を癒してくれる唯一の居場所であったが、憧れていた外の世界で本当に自分の居場所を獲得したとき、庭園という狭い世界はもはや必要なくなったのである。庭園はいくまでも一時的な避難場所であって、真に帰ってくる場所として獲得されるものではない。一方トムは庭園に永遠に残りたいと思っていたが、彼も最後には庭園に行くことができなくなり、居場所としての庭園を喪失することになってしまっている。

ここまでトムとハティにとって庭園がどのような存在であるかについて論じてきた。2人にとって庭園は孤独を癒してくれる居場所であったが、これは最後には失われるものであ

る。では、庭園には一時的な逃避の場所としての意味しかないのだろうか。ハティは幸福な結婚生活の中では庭園やトムについて思い出すことはほとんどなかったが、子どもと夫を失い彼女が再び孤独になった時、庭園は記憶として新たに意味を持つようになった。孤独な生活の中でハティは毎晩庭園の夢を見て少女時代に戻っていた。庭園で過ごした少女時代の思い出が再び孤独になった彼女に慰めを与えているのである。現実の庭園は居場所としての意味を一度は失い、トムの時代では存在自体も失われてしまったが、庭園の記憶はハティの中に生き続けている。トムも失った庭園をハティの中に再び発見し、自分の中に獲得している (335)。この記憶としての庭園は変わることなく、失われることのない永続性が保障された存在である。トムとハティにとっての庭園は一度は失われるものの、2人が大人になったとき今度は失われることのない永遠の楽園として獲得され、庭園の記憶が孤独を癒す慰めになるのである。

永遠の楽園として獲得された庭園とは、ハティとトムの幼少時代の思い出そのものである。『トムは真夜中の庭で』では時間が鍵になっていて、真夜中に現れる庭園や屋敷が現在トムが住んでいるアパートの過去の姿であることや、ハティがパーソロミュー夫人であることを理解し、また大人になって自分のことも庭園のことも思い出さなくなったハティを受け入れたことによって、トムは時間が人や物にもたらす変化を理解し、受け入れた。また、庭園を失うことを恐れていたトムはパーソロミュー夫人がハティであると理解した瞬間、失ってしまった庭園をハティの中にもう一度発見する。トムは時間がもたらす変化や喪失について理解するとともに、失われ、形を変えても過去が思い出として現在に生き続けること、記憶という慰めを与えてくれることを知ったのである。この時間がもたらす変化についての理解がフィリッパ・ピアスが『トムは真夜中の庭で』において描こうと試みたものであるが (ピアス 349)、最も重要なのは庭園の記憶に象徴される過去の思い出が与える慰めをトムが理解したことであるだろう。

ここで描かれる時間がもたらす変化に対する理解は、子どもから大人への成長といった個人的な出来事に限らず、急激な変化に対して当惑していた社会へのメッセージであるとも考えられる。『トムは真夜中の庭で』が出版された 1950 年代のイギリス社会では大英帝国の崩壊や国際的影響力の低下に加え、アメリカ文化の流入や大衆文化の発展といった文化的変化、階級社会の揺らぎなど急激な変化と伝統の危機の中にあつた。こうした時代の中で、『トムは真夜中の庭で』は変化に対する理解を促し、過去は記憶として人々を癒すことができることを訴えているのではないだろうか。美しい思い出として過去を振り返るパーソロミュー夫人の郷愁も変化の中で戦前の伝統的な封建社会、大英帝国の繁栄を振り返る 1950 年代のイギリス社会の郷愁と重ねることができるだろう。フィリッパ・ピアスが『トムは真夜中の庭で』を通して時間がもたらす変化について描いた背景にも、自身が幼少時代を過ごした庭園が自分が住んでいたところから執筆に至るまでの期間でまったく変わってしまったという事実がある (ピアス 348)。ハティが 1896 年頃に結婚して屋敷を出た後、事業に失敗したハティの従弟が牧場や果樹園、庭園に邸宅まで全て売ってしまったことや、

屋敷がアパートになっていることはカントリー・ハウスが次々と売り飛ばされ、取り壊されたり改築されていた 1950 年代当時の状況そのままである。トムとハティの失われた庭園は現実のイギリスで失われていったカントリー・ハウスや庭園と重なり、2 人にとって庭園が意味する幼年時代はイギリスの過ぎ去った過去、古き良きイングランドの表象として捉えることが可能である。であれば、この作品には喪失してしまったものは現実には戻ってこないが、思い出が寂しさや苦しみを緩和してくれること、失ってしまったように見える過去や伝統が個人の中で生き続けているという社会に対するメッセージが込められていると考えられる。

本章では 1950 年代に存続の危機に瀕していたカントリー・ハウスが、当時危機的状況にあったイギリス社会の伝統に重ねあわせられ、イングランドの伝統と過去の象徴としてファンタジー文学の舞台となっているのではないかという仮説の妥当性を検証するため、『床下の小人たち』、『グリーン・ノウの子どもたち』、『トムは真夜中の庭で』の 3 作品においてカントリー・ハウスや庭園が作中でどのような役割を果たし、どのようなものとして描かれているのかを論じた。すべての作品において伝統の揺らぎや生活の変化、過去への郷愁が描かれており、また、カントリー・ハウスや庭園はこれらのテーマと結びつき話の展開上非常に重要な役割を果たしている。さらにどの作品においても現実世界におけるカントリー・ハウスの危機が反映されており、作品に登場するカントリー・ハウスや庭園をイングランドの伝統や過去の象徴として捉えることは可能であった。以上のことから、仮説の通り 1950 年代に存続の危機に瀕していたカントリー・ハウスが同じく危機的状況にあったイングランドの伝統と過去の象徴として舞台になっている可能性は高いと言える。また、作中のカントリー・ハウスは理想的な場所として描かれているものの、作品の展開からは過去の称賛ではなく、伝統が形を変えて続いていることや、過去の慰めによって孤独や苦しみを癒し現実を生きることができるというメッセージを読み取ることができる。1950 年代のファンタジー文学においては、居場所としてのカントリー・ハウスとその衰退について描くことで、過去が現在においてもつ意味や変化を受け入れつつ伝統を尊重する必要性が描かれているのではないだろうか。

しかし作品においてカントリー・ハウスが過去や伝統と結びついているように見えるものの、当時の読者がカントリー・ハウスを過去の象徴として読み取ったのか、そして歴史的遺産というだけでカントリー・ハウスをイングランドの伝統の象徴と言えるかについては疑問が残る。次章ではカントリー・ハウスの状況とイギリス人がカントリー・ハウスに対して抱いているイメージから、カントリー・ハウスをイングランドの伝統や過去の象徴として見なすことができるかどうかの検証を行う。

3. カントリー・ハウスとイングランドの伝統

前章では1950年代のファンタジー文学に登場するカントリー・ハウスや庭園は危機的状況にあったイングランドの伝統の象徴として描かれているのではないかという仮説を提示し、作品の分析を通して検証を行った。本章ではカントリー・ハウスをイングランドの伝統と過去の象徴として見なすことができるかという観点から仮説の検証を行う。そのためにカントリー・ハウスの置かれている状況とイメージについて論じ、なぜカントリー・ハウスという特定の場所が選ばれたのかを考察する。

3-1 カントリー・ハウスのイメージ

カントリー・ハウスは歴史ある場所ではあるが、本来貴族の屋敷でありイングランドの伝統の象徴であるとは言い切れないのではないだろうか。本節では、カントリー・ハウスがイングランドの伝統、過去というイメージと結びつくのかどうかを確かめる。そのために、筆者が2016年8月にバース、オックスフォード、ロンドンのイングランドの3つの都市周辺にあるカントリー・ハウスや歴史的建造物において、女性11人、男性4人の計15人のイギリス人に行ったインタビュー結果から、現代のイギリス人がカントリー・ハウスに対して抱いているイメージを考察する。まずイギリス人がカントリー・ハウスをどのようなものとして見なしているのかを調査するために、カントリー・ハウスにどのような魅力を感じるか、カントリー・ハウスに対してどのようなイメージを抱いているのかという質問をした。そして、カントリー・ハウスを伝統の象徴としてみなすことが可能かどうかを検証するために、カントリー・ハウスはイングランドの伝統の象徴だと感じるかについて質問をした。

まず、カントリー・ハウスに魅力を感じる理由から、イギリス人がカントリー・ハウスをどのようなものだと考えているのかを考察する。魅力を感じる理由として多かったのは、「カントリー・ハウスは歴史や過去の人々の暮らしを教えてくれるから」、「歴史が好きだから」という意見と「建築に興味があるから」という意見である。歴史や過去を知ることができるという理由が多いのは、現存するカントリー・ハウスの多くが一般公開されていて、屋敷の所有権の移り変わりや家族の歴史、建築から改修に関する解説を読みながら当時の内装や調度品が残った屋敷の内部や庭園を見ることができるからであろう。実際にカントリー・ハウスを訪れることで、戦前までの貴族がどのような暮らしを送っていたのか、どれほどの人が屋敷で働いていたのかなどについて知り、歴史を学ぶことができる。また、「家族と使用人の関係性や社会の組織を見ることができる」という意見もあることから、カントリー・ハウスでは屋敷を所有していた貴族だけでなく、そこで働いていた使用人や支配されていた領民の暮らしを含めた歴史を感じさせる場所であるとみなすことができる。

カントリー・ハウスに対してどのようなイメージを抱いているかという質問への回答で一番多かったのも「歴史」という回答であった。「カントリー・ハウスの歴史の背景には住んでいた人々、関わった人々の物語がある」という意見や、「そのカントリー・ハウスに住

む家族の歴史がある」という意見から、カントリー・ハウスは単に歴史的建造物として価値があるだけでなく、そこに住んでいた人について過去を想像させる場所でもありと考
えられていることがわかる。他には庭や田園風景を重要なものとしてあげる意見や、壮大
というイメージがあり、また、色んな側面があるという意見と「家によって異なるため普
遍的なイメージは語れない」という回答もあった。人によってカントリー・ハウスに対す
るイメージはそれぞれだが、カントリー・ハウスは過去というイメージと特に結びついて
いるといえる。

ここでもう 1 つ着目したいのはカントリー・ハウスのイメージとしてファンタジーがあ
がっていることである。数は多くなかったもののカントリー・ハウスにファンタジーのイ
メージがあるならば、ファンタジー文学の舞台としてカントリー・ハウスが選ばれた 1 つ
の理由になるだろう。「カントリー・ハウスのような古い場所は想像力に富んだ、非現実的
な場所である」という意見があり、死んでしまった人々、過去の人々の生活や彼らとのつ
ながりを感じることができる場所であるという考えがあった。このようなインタビューで
の回答から、人々が暮らしていた部屋や調度品を現代に残し、訪れた人々に過去を想像さ
せるカントリー・ハウスは、想像力を刺激するという点においてファンタジー文学の舞台
として適しているのではないかと考えられる。本論文の第 1 章第 2 節において、グリム童
話などの昔話の時代では舞台が近隣の森であったのが、科学技術の発達により森や異国が
非現実的な場所ではなくなったことからファンタジー文学の舞台が異世界へと移っていっ
たと述べたが、カントリー・ハウスは今ではほとんど人が住んでおらず、生活空間ではな
くなった非日常的な場所である。都会から離れ日常生活の場と離れたカントリー・ハウス
では非日常的なことが起こる余地が残されていると考えられる。

最後に、カントリー・ハウスがイングランドの伝統の象徴だと感じるかという質問に対
する回答を確認する。この質問に対して 9 人が「伝統だと感じる」と答え、6 人が「感じな
い」と答えた。まず、伝統の象徴だと感じる人と答えた人の意見を見ると、「カントリー・ハ
ウスは貴族の文化であるものの、イングランドの暮らしや文化を示すものの 1 つである」
という考えがあった。また、「広大な屋敷ではたくさんの人たちが働いていたから」という
意見もあり、貴族だけでなく下層階級の間人もカントリー・ハウスで生活していたことか
らイングランドの伝統だと見なしているのだと考えられる。一方、伝統だと感じないとい
う意見では、やはり「住むことができたのは豊かな人々だけで、あくまでも貴族の伝統の
象徴である」という意見が複数あがっていた。過去や歴史を感じる空間であるが、イン
グランドの伝統だとは思えないということである。また、伝統の象徴だと感じる人と答えた人
の中にも「カントリー・ハウスに住めたのはほんの一握りの人だけである」と述べている
人はいた。やはりすべての人がカントリー・ハウスをイングランドの伝統の象徴だと考え
ているわけではないものの、貴族が支配していた歴史を含め伝統と考えられることや、使
用人や領民とも関わることから伝統と見なす人もいることから、インタビュー結果を踏ま
えてカントリー・ハウスを伝統の象徴の 1 つとして見なすことは可能である。今では当時

とは暮らしが全く変わってしまったことから、ドラマや映画で見る戦前の暮らしにロマンチックな憧れを抱く人もいるという意見も聞くことができた。インタビューの結果からは、古いものに価値を置く人が多いこともあり、過去を残しているカントリー・ハウスは伝統を象徴すると感じているのだと考えられる。

本節では筆者がイングランドで行ったカントリー・ハウスに関するインタビュー結果からイギリス人がカントリー・ハウスをどのようなものだと考えているのかを考察し、カントリー・ハウスと過去や伝統との結びつきについて論じた。カントリー・ハウスはそこに住んでいた過去の人々の暮らしや、建築や庭を含めた当時の文化を学ぶことができる場所としてイギリス人に過去のイメージを抱かせる場所であった。イングランドの伝統の象徴として見なせるかという質問に対しては意見が分かれたため、伝統の象徴と言い切ることはできないが、イングランドの建築、庭、階級、衣食住など様々な歴史、文化と結びついたイングランドの伝統の1つとして捉えることは可能である。これらの結果から、カントリー・ハウスが1950年代のファンタジー文学においてイングランドの過去や歴史の象徴として描かれているという仮説は現在のイギリス人のカントリー・ハウスに対するイメージと矛盾しないことが明らかになった。

3-2 国民的遺産としてのカントリー・ハウス

前節では、カントリー・ハウスが伝統や過去といったイメージと本当に結びつくのかを、インタビュー結果を基に論じた。現在では、カントリー・ハウスは過去のイメージと結びつき、伝統の象徴の1つとして考えられていることが分かったが、作品が出版された1950年代ではどのように考えられていたのだろうか。本節では、特に19世紀末からのカントリー・ハウスの状況に着目し、現在のカントリー・ハウスに対するイメージがどのように形成されたのか、いつごろから一般の人々にカントリー・ハウスが受け入れられていったのかについて考察する。

前章で述べたように1879年から始まった農業の大不振によってカントリー・ハウスの所有者である貴族の所有財産の価値は減少していき、政治権力も彼らの手を離れていった。この頃から貴族の権力の象徴であったカントリー・ハウスは衰退していったと言える。不動産に相続税と累進課税が導入されたことで大土地所有制度は崩壊し始め、資産を手放す地主も増えていった。産業革命によって屋敷の維持の要である大勢の使用人も工場に働き口を見つけるようになり、世界大戦に出兵する者も多くいた。さらに第二次世界大戦中には軍司令部の疎開先にカントリー・ハウスが選ばれたために兵士たちによってカントリー・ハウスは館内にも外部にも酷い損壊を受け、再興は一層難しくなった。取り壊されてホテルや病院になったものもあるが、カントリー・ハウスのほとんどはボランティア団体の保護を受けるか、個人の下で一般公開を行って修繕と維持の費用を確保した。貴族たちはボランティア団体にカントリー・ハウスを寄贈して別の場所に移り住んだり、公開していない建物の中の一部に住んだりしている。こうして大勢の使用人を雇い、広大な土地を

所有する、貴族の権力の象徴であったカントリー・ハウスは姿を消していった。

こうした状況にあって、カントリー・ハウスの多くは特にイギリス最大のボランティア団体であるナショナル・トラストの管理下に置かれることになった。ナショナル・トラストは、ナショナル・トラスト法によって貴族に対し維持できなくなったカントリー・ハウスの相続税の免除などの優遇措置を与えることで資産として獲得していったのである。貴族たちは一定期間屋敷を一般公開することを条件にそのまま住むことを許されたため、第二次世界大戦後ますます多くのカントリー・ハウスがナショナル・トラストに集まるようになった。このように多くのカントリー・ハウスを管理下に置き一般に公開していったナショナル・トラストは戦後のカントリー・ハウスのイメージ形成に大きく関わっているのではないかと考えられる。そもそもなぜ貴族の住居であったカントリー・ハウスのほとんどを所有するまでに、ナショナル・トラストはカントリー・ハウスの保護に力を入れたのだろうか。その理由はナショナル・トラスト設立の目的と背景にある。

ナショナル・トラスト（歴史的な名所や自然的景勝地のためのナショナル・トラスト）は歴史的建造物の保護を目的としてオクタヴィア・ヒル、ロバート・ハンター、ハードウィック・ローンズリーの3名によって1895年に設立された。ナショナル・トラストはカントリー・ハウスのような資産を会費や会員以外からの寄付金により購入したり、所有者から譲渡されるなどして獲得し一般に公開してきたが、こうした活動の目的は祖先から伝わるイギリスの歴史や文化、すなわち「イギリスらしさ」を守り、次世代に引き継いでいこうというものである。当時のイギリスでは社会構造の変化のために、共通の過去を創り出してナショナル・アイデンティティ、つまり **British identity** を創造・強化しようという動きが活発になっていたと環境学者の水野祥子は述べている(204)。上記のように1870年代以降農業不振の影響で伝統的な貴族などの地主中心の支配体制が揺らいでいたことに加えて、1867年と1884年の選挙法改正によって労働者階級の上層部にも選挙権が与えられたことで、彼らを取り込む形でイギリス社会を統合しようという動きが強まっていた。アイルランドの自治権の問題など独立を求める動きや、欧米諸国におけるナショナリズムの高揚もあり、エリート層の間でイギリスの国民統合が遅れているのではないかという危機感が広がっていたのである。ナショナル・トラストの保護活動もナショナル・アイデンティティを強化する動きの一環で、ナショナル・トラストの中核を担ったエリート層が歴史を思い起こさせる空間に愛国心を喚起し、国民の一体感を促進する装置としての効果を期待したのだと水野は指摘している(204)。実際、記念式典や歴史的建造物によって愛国心を育てているフランスやドイツに比べて、イギリスは歴史を反映する場所への興味や愛国心を喚起する行為を怠っていると指摘するなど、ナショナル・トラストのメンバーも危惧を表わしている。ナショナル・トラストは単に環境保護活動を行っているのではなく、歴史的建造物や景勝地に国を作り上げてきた祖先や偉大な過去の出来事を思い起こさせる場所という意味づけをし、国民の遺産として保護する活動を始めたのである。

このようにナショナル・トラストはナショナル・アイデンティティを強化することを目

的として、イギリスらしさを守り次世代に引き継ぐために歴史を思い起こさせる歴史的建造物や景勝地を保護した。つまり、ナショナル・トラストが保護した建造物や土地はナショナル・トラストの中心であったエリート層がイギリスらしいものとして保護する必要があると考えたものである。例えば景勝地ではローマの遺跡やドルイド・サークルが残る湖水地方のように単に美しいだけでなくイギリスの歴史を表象する場所であることが重要視された。また当初はイギリスらしさの範囲はイングランドに限定されず、保存に関わった場所もウェールズ、スコットランド、アイルランドも含まれていた。しかし第一次世界大戦後 1922 年にアイルランド自由国が成立しダブリンにあった支部との関係が断たれ、スコットランドでも 1931 年に別組織としてスコットランド・ナショナル・トラストが設立された。これ以降、ロンドンに本部を置くナショナル・トラストの活動はイギリスからイングランドに限定されていくことになる。ここで 1930 年代からナショナル・トラストが力を注ぐようになったのが庭園や農地を含むカントリー・ハウスの保存である。つまりナショナル・トラストは過去や歴史を思い起こさせる「イングランドらしい」ものとしてカントリー・ハウスを選んだのである。このことから貴族の遺産であるカントリー・ハウスがイングランドの過去や伝統といったイメージと結びついていったのではないだろうか。イングランドらしいものを保護することを目的としたナショナル・トラストがカントリー・ハウスの保全に力を注ぎ一般に公開していったことで、支配階級の遺産であるカントリー・ハウスが国民の遺産として読み替えられていったのだと考えられる。

しかし、なぜナショナル・トラストはカントリー・ハウスをイングランドらしいものとして選び、さらにそれが国民に広く受け入れられたのだろうか。ナショナル・トラストがカントリー・ハウスの保存に力を入れた理由として、20 世紀前半までナショナル・トラストの中核はエリートで構成され会員の大半も中産階級であり、活動の方針が中産階級以上の意思によって決められていたことが考えられる。地主階級が手放した資産を入手するために評議会のメンバーである地主貴族のネットワークを通じて働きかけるなど、ナショナル・トラストの活動の中心にはカントリー・ハウスを所有していた貴族たちがいたのである。崩壊の危機にあったカントリー・ハウスをナショナル・トラストが保存しようとしたのは当然といえるだろう。カントリー・ハウスは中産階級以上の人々によってイングランドの過去や歴史を表わすものとして保護されたのである。

これが労働者階級を含む国民にも受け入れられたのは、戦後ナショナル・トラストの活動に労働者階級が参加するようになったことで、中産階級や貴族たちの創造したナショナル・アイデンティティが労働者階級にも広まっていったからだと考えられる。第二次世界大戦後、国民所得の増加や労働時間の減少、交通手段の向上によって休日に田園に出かける人々が増え、歴史的建造物や自然環境への関心が高まっていたと水野は述べている (209)。1970 年代以降ナショナル・トラストの会員数も急増していき、それに伴い下層中産階級や労働者階級の参加が目立つようになった。ナショナル・トラストの意思決定に一般会員がもっと参加できるようにという要求から 1971 年にはナショナル・トラスト法が改正され一

般会員の影響力も増していき、エリート中心だったナショナル・トラストのあり方は変化していった。こうしてナショナル・トラストの活動に労働者階級も多く参加するようになったことで、中産階級がイングランドの過去として次世代に引き継ごうとしていたカントリー・ハウスが大衆にも受け入れられていったのではないかと考えられる。実際余暇が増えたことでカントリー・ハウスへの訪問が流行して、田園は観光資源としての役割を担うようになっていった。ナショナル・トラストの資産が「ハリー・ポッター」シリーズや『日の名残り』、『高慢と偏見』などイギリスの田園を舞台にした映画の撮影地として利用されていることも、カントリー・ハウスを含めたトラストの資産がイングランドらしいものだと人々に印象づけたのだと考えられる。

ここまでカントリー・ハウスは1950年代のイギリスにおいてイングランドの伝統や過去というイメージを持たれていたのか、いつ頃からそうしたイメージが広まったのかを確かめるために、19世紀末から多くのカントリー・ハウスを管理下に置き始めたナショナル・トラストに焦点を当て戦後のカントリー・ハウスのイメージ形成について論じてきた。イギリスの歴史や文化などイギリスらしさ、特に戦後はイングランドらしさを守り、ナショナル・アイデンティティの強化を目指したナショナル・トラストがカントリー・ハウスの保全に力を入れたことで、支配階級の遺産が国民的遺産へと読み替えられていった。戦後は田園地帯やカントリー・ハウスの訪問が流行し、ナショナル・トラストの会員数も増加して労働者階級が活動の主体になっていったことで、中産階級や貴族が提示したイングランドらしいものとしてのカントリー・ハウスが大衆にも広まり、受け入れられるようになった。カントリー・ハウスは第二次世界大戦以降貴族の権力の象徴から、国民が受容すべき国民遺産、イングランドの伝統の象徴と見なされるようになったのである。

『床下の小人たち』、『グリーン・ノウの子どもたち』、『トムは真夜中の庭で』にもこのような状況が反映され、過去や伝統の象徴としてカントリー・ハウスが舞台になったのだと考えられる。また、それぞれの作品の作者は自身が住んでいた家を作品に登場するカントリー・ハウスのモデルにしていることから、彼女達がイングランドの過去や伝統の象徴としてカントリー・ハウスを作品の舞台にしたのは、ナショナル・トラストの中心であった上流及び中産階級の間人間がカントリー・ハウスをイングランドらしいものとして保護しようとしたように、上流及び中産階級の間人間だったためにカントリー・ハウスをイングランドの伝統の象徴だと考えていたのだと考えられる。どちらにしても、作中で描かれるカントリー・ハウスをイングランドの過去や伝統の象徴として捉えることは可能である。そして、以上を踏まえると、1950年代に存続の危機に瀕していたカントリー・ハウスは、同じく危機的状況にあったイングランドの伝統と過去の象徴としてファンタジー文学の舞台になっていると結論づけることができる。

終章

本論文では 1950 年代に出版されたイギリスの代表的なファンタジー文学にカントリー・ハウスがなぜ登場するのか、その理由を明らかにすることを主題として、1950 年代のファンタジー文学の中でも物語の舞台がカントリー・ハウスやその庭である『床下の小人たち』、『グリーン・ノウの子どもたち』、『トムは真夜中の庭で』の 3 作品を取り上げ伝統や過去の喪失という観点から分析を行った。舞台がカントリー・ハウスであるという共通点には、作品が書かれた 1950 年代のイギリス社会の影響があるという前提のもとに、当時のイギリス社会について考察し、その影響が作品にどのように表れているのか、カントリー・ハウスは何を表わしているのかを論じた。

まず第 1 章では、ファンタジー文学がもつ役割とは何か、現実世界とどのような関係を持つのかを論じ、作品が出版された 1950 年代当時のイギリス社会の状況について述べた。ファンタジー文学は神話や童話などの昔話を起源として超自然的な事柄、非現実的な物事を扱いながら、それらをリアリズムの手法によってリアルに描くものであると定義し、現実世界からの「逃避」と「慰安」を可能にする力を持っているものであることを確認した。これはファンタジー文学が現実と密接に結びつき、現実を反映する物語だからである。このような特徴をもつため、現実社会が深刻な問題を抱えているときには特に優れたファンタジー文学が生まれることになる。優れたファンタジー文学が多く出版された時代の 1 つである 1950 年代は、イギリス社会が大きく変わり始めた時代であった。経済の好転や社会保障の充実など豊かさを享受しながらも、大英帝国の崩壊や戦後の莫大な借金、労働者階級の台頭や大衆文化の発展など社会構造や文化の変化が起こり、個人主義と快楽主義の助長など伝統的価値観も大きく揺らいでいた。このような状況が優れたファンタジー文学を多く生み出した要因となっている。

第 2 章では、1950 年代のファンタジー文学にカントリー・ハウスが多く登場するのは、イギリス社会の変化や伝統の危機といった問題を反映して、既に衰退しつつあるカントリー・ハウスをイングランドの伝統の象徴として理想的に描くことで過去を理想化しているからではないかという仮説を提示した。そしてこの仮説の妥当性を検証するため、カントリー・ハウスを舞台とする 1950 年代のファンタジー文学を伝統や過去との関わりに焦点を当てて論じた。『床下の小人たち』では、小人たちの迎える運命に生活や価値観の変化、伝統の終焉が表れていて、舞台となるカントリー・ハウスは小人たちが安全に暮らすために重要な規範と伝統的生活を象徴するものであるとともに、衰退したイングランドの伝統を示すものの 1 つであることがわかった。『グリーン・ノウの子どもたち』では、物語の中心となるグリーン・ノウ屋敷が、主人公に過去とのつながりを感じさせ、孤独を癒すために重要な役割を持っていることを論じた。グリーン・ノウ屋敷は当時のイギリスにおいて喪失の危機にあった過去や伝統の象徴であり、人に癒しを与えることができる存在として、その重要性が描かれている。『トムは真夜中の庭で』では、時間がもたらすものに関する理解という作品のテーマについて論じた。大人になって庭園は失われてしまったが、幼少時代

の思い出を表す庭園の記憶が孤独を癒してくれるという事実は、時が変化と喪失を引き起こす一方で、過去は思い出となって自分の中に生き続け、慰めを与えてくれるのということを知ることができる。すべての作品において、伝統の揺らぎや過去が与えるものが描かれていることから、伝統的生活や価値観が大きく変化していた当時のイギリス社会の状況が作品に反映されていることは明らかである。カントリー・ハウスは仮説の通り衰退しつつある伝統や過去の象徴として描かれ、伝統が形を変えて現在に生き続けていることや、記憶が与える意味を伝えている可能性が高いことを示した。

第3章では、カントリー・ハウスに対するイメージについて論じ、カントリー・ハウスが本当にイングランドの伝統の象徴として描かれているのかという観点で仮説の検証を行った。現地でインタビューを行った結果、現在ではカントリー・ハウスを誰でも訪れることができ、過去の人々の暮らしを知ることができることや、その建築や家族の歴史を学ぶことができることから、イギリス人はカントリー・ハウスに過去というイメージを強く持っていることが分かった。カントリー・ハウスは貴族だけに關わる遺産であるので、イングランドの伝統の象徴とは言えないとも考えられるが、そこには使用人として労働者が必須であり、彼らも屋敷で生活していたことや、貴族が支配した戦前のイギリス社会を象徴することからも、カントリー・ハウスをイングランドの伝統を象徴するものの1つとして捉えることは可能である。このように、貴族の遺産であるカントリー・ハウスがイングランドの過去や伝統というイメージと結びついた背景には、エリート層を中心としてイングランドらしさを守ることを目指したナショナル・トラストが、カントリー・ハウスの保存に力を入れたことがある。これにより支配者階級の遺産が国民的遺産に読み替えられ、ナショナル・トラストの活動の広がりとともにそのイメージが大衆にも広まり、受け入れられていった。このことから、カントリー・ハウスが消滅の危機にある国民的遺産として、同じく危機的状況にあったイングランドの伝統の象徴となり、作品の舞台となったという見方は可能である。

上記のことから、大英帝国の崩壊や伝統的価値観の崩壊、社会構造の変化といった時代背景の下で描かれた1950年代のファンタジー文学に登場するカントリー・ハウスは、衰退したイングランドの伝統や過去を象徴するものとして作品の舞台となっていると結論づけることができる。カントリー・ハウスを伝統の象徴とすることや、繁栄していた戦前の暮らしを古き良きイングランドとして振り返り郷愁を抱くことは貴族的な価値観であるとも受け取れる。しかし、これらの作品に共通する、伝統的暮らしを捨てて新しい生活を始める、過去との交流により新しい自分の居場所を獲得するという筋書きは未来を見た前向きな視点であり、大きな変化を迎えていた当時のイギリス社会に変化を受け入れて現実を生き抜く力を与えていたのである。1950年代のファンタジー文学に共通するテーマと社会に向けたメッセージを明らかにしたことにより、これらのファンタジー文学の新たな価値を示したことが本論文の意義である。

参考文献

- 安藤聡「現代英国ファンタジーとその背景」、『大妻比較文化：大妻女子大学比較文化学部
紀要』12号、2011年、119-138
- 『ファンタジーと歴史的危機—英国児童文学の黄金時代』彩流社、2003年
- 井辻朱美「ファンタジーとはなにか」、『平成16年度国際子ども図書館 児童文学連続講座
講義録「ファンタジーの誕生と発展」』、国立国会図書館国際子ども図書館、2005年
- 伊藤紀美江『『床下の小人たち』に見られる「英国らしさ」』、『保育研究』平安女学院大学、
43号、2015年、19-24
- 川越ゆり「The Children of Green Knowe: 「聖なる時間」の物語」、『山形短期大学紀要』
42集、2010年、45-54
- 定松正「イギリスのファンタジー」、『平成16年度国際子ども図書館 児童文学連続講座講
義録「ファンタジーの誕生と発展」』、国立国会図書館国際子ども図書館、2005年
- 桂宥子「児童文学の黄金時代—その特色と意義」桂宥子・高田賢一・成瀬俊一編『英米児
童文学の黄金時代—子どもの本の万華鏡』、ミネルヴァ書房、2005年
- ロバート・クロス「若者文化と戦後イギリス社会」田口哲也訳、小野修編『現代イギリス
の基礎知識—英国は変わった』、明石書房、1999年
- 杉恵惇宏「貴族の城館と庭園」佐久間康夫・中野葉子・太田雅孝編『概説イギリス文化史』、
ミネルヴァ書房、2002年
- 谷本誠剛『児童文学入門』、研究者出版、1995年
- J・R・R・トールキン『妖精物語について—ファンタジーの世界』猪熊葉子訳、評論社、
2003年
- メアリー・ノートン『床下の小人たち』林容吉訳、岩波書店、2000年
- 橋本恵「1950年代のファンタジー：『グリーン・ノウの子どもたち』および『トムは真
夜中の庭で』を中心として」、『アカデミア. 文学・語学編: Journal of the Nanzan
Academic Society』南山大学、97号、2015年、167-173
- フィリッパ・ピアス『トムは真夜中の庭で』高杉一郎訳、岩波書店、2000年
- デイヴィッド・プリングル『図説ファンタジー百科事典』井辻朱美訳、東洋書林、2002年
- ルーシー・M. ボストン『グリーン・ノウの子どもたち』亀井俊介訳、評論社、2008年
- 水野祥子「ナショナル・トラストにみる「イギリスらしさ」」指昭博編『はじめて学ぶイギ
リスの歴史と文化』、ミネルヴァ書房、2012年
- 三宅興子『イギリス児童文学論』翰林書房、1993年
- C・S・ルイス『別世界にて』中村妙子訳、みすず書房、1978年
- 「ファンタジー」、『広辞苑』、第六版、岩波書店、2008年
- Aers, Lesley. "The Treatment of Time in Four Children's Books" *Children's Literature in
Education: An International Quarterly (CLE)*. 1 (2)1970. 69-81.
- Christopher, David P. *British Culture: An Introduction*. London: Routledge, 2015.

- Hand, Nigel. "Mary Norton and The Borrowers" *Children's Literature in Education*. (3) 1972. 38-55.
- Shirasu, Yasuko. "Lucy Boston's Kaleidoscopic World of Fantasy in The Guardians of the House" 『人文研究：神奈川大学人文学会誌』 163 卷、2007 年、227-246.
- Travis, Madelyn. "Mixed Messages: The Problem of Class in Mary Norton's Borrowers Series" *Children's Literature in Education: An International Quarterly (CLE)*. 38 (3)2007. 187-194.